

令和7年10月総評

西躰 かずよし

青春の死因  
を  
語る窓にいて  
ぼうくうごうの昏がりが来る

さいう 石川県

青春の死因とは何だろう。賭けるものなくすとか、未来への期待を失うといったことだろうか。それは、おそらく問うよりも前に、問われることから生まれるものだと思う。僕たちが「ぼうくうごうの昏がり」に惹かれるのは、その死までの昏さによって、ひとときの青春を救済しようとするからだろう。

夏の語彙みたいに波を脱ぎ捨てる  
テトラポットは海の読点

常田 瑛子 山口県

夏のまんなかには、テトラポットが浮かぶ。それは、数多のことばに誘われて、さざめく波を脱ぎ捨てる。海にのくる、読点の安息。

水仙と睡蓮を言い間違える  
ひとり暮らしをしたいと思う

福山ろか 埼玉県

水仙と睡蓮は違うものだとみんな分かっている。でも、その一節からは、おっちょこちよいな語り手の様子が伝わってくる。

落ち込むわけでもなく、騒ぐわけでもない。ひとり暮らしをしたいという、ささやかな表明。それは、ひとりの大人として生きていきたいという、ひとときの宣言なのかもしれない。

ダンボールの匂いあしたは月曜日

背腹 風太 北海道

何かの拍子に、明日を思い出す。休日のあの月曜。おなじ日のはじまり。ダンボールの匂いは、郷里からの荷物をほどいたときのものだろうか。それとも捨てる際のものだろうか。明日へとつながるダンボールの匂い。

この世よりうつくしい場所

知らなくて

グレープフルーツ横に切る夜

小川 未夜子 石川県

生きている場所以外のところなんてないのだと思う。ただ、そのあたりまえを思い出すのに、あたりまえではない痛みがはしる。そして真横に切る、ほろ苦いグレープフルーツ。

何もないスノウドームに

いるようで

まだ

あたたかい骨をひろえば

まちのあき 宮城県

このあいだまで生きていた人が、かんたんに骨へと変わる。水底で待つかのようなしづ

かな時間。

何もないスノウドームに置き去りにされないようにと、故人の骨は、自身のぬくもりで、そっと僕らをつつむ。

いちごのような私

いちごのような自殺

タルミフミヤ 東京都

いちごのような私には、特定の私は必要ないのかもしれない。私の固有性や、自殺の一回性が、ありふれたものへと変わる。

付与される、とりかえようのない人生は、息苦しくて。数えることができる、いちごのような気楽さと、さびしさへと、自分を変えてしまいたくて。だから、まちがいのようないちごの死をひとり待っている。

私たちがけものの名前だったころ

葡萄に夜が満ちていたころ

ケムニマキコ 京都府

もし僕たちが、ひとしくけものの名前だったら、自身の名前はなかったはずで。もしそうなら、僕たちには、はじめからどんな悲喜劇もなかったはずで。

葡萄に夜が満ちていたのは、世界が完全だったときのことで、だからそこには、もうもどることはできないと、何度もくりかえす。

橋のつく駅の連続いわし雲

早瀬はづき 大阪府

車窓からの風景。橋が含まれる名まえの駅がつづく。僕たちもまた橋を幾度も越える。

そこに広がる、いわし雲。秋が、僕らをとおくへ連れていく。

秋の宵

パセリっぽっぽと散らばせて

大西 美優 広島県

っぽっぽってくらいのいいかげんさで、パセリを散らばせる。いろいろなことがあってもいいよって。忘れてもいいよって。まほうみたいにやってくる秋の宵。